

# 2023-24 年度 Weekly Report

## 【本日の行事】 第6次長久手市総合計画について 伊藤 広治会長



どの市町村にもまちづくりの指針となる計画があります。長久手市も市民主体のまちづくりを推進する取り組みとして「ながくて未来図」と柔らかいネーミングとした計画書があります。現在は2019～2028年を期間とした第6次計画ですが、第1次は1974年から始まっており、第1次から第3次は土地区画整理事業をはじめとする住宅都市化、第4、5次は愛・地球博の計画からもベッドタウンや交流都市化としての発展、そして現在の第6次に繋がります。概ね計画通りの成長になっていることに驚きました。長久手市は行き当たりばったりでここまで来たと思ってました。

計画内の基本目標は7つあり「ひとづくり、子ども、自然環境、生活、交流、都市経営、市政運営」です。そこから政策、施策に40数個に細分化され13個の重点項目がございます。我がクラブの奉仕活動も市の計画に照らし合わせた中から考えていきたいと思えます。

### 1. 計画の位置づけ

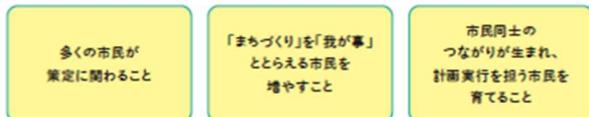
#### ～2050年に向け、市民主体のまちづくり文化を育む種を蒔こう！～

本市は、1974(昭和49)年に第1次総合計画を策定してから第5次に至るまで、土地区画整理事業をはじめとする都市基盤整備により住宅都市としての資格を認め、2005(平成17)年に開催された愛・地球博とリニエの開港を契機に、多様な交流を生み出す交流都市として発展してきました。その結果、1969(昭和44)年当時の1万人程度だった人口も、現在は約6万人に達するほどになりました。

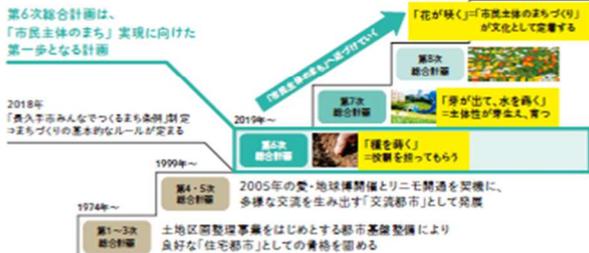
しかし、我が国全体で見ると、2008(平成20)年が「人口減少元年」とされ、すでに人口減少時代を迎えています。今は人口が増加している本市においても、いずれは人口減少が訪れ、高齢化は一層進み、厳しい財政運営を強いられることが予想されます。そのような時代に対応するには、今のうちから時間をかけ、行政主導のまちづくりから、市民と行政が協働する市民主体のまちづくりへ転換する必要があります。

第6次総合計画(以下、「ながくて未来図」という)は、2050年には老若男女がまちづくりに関わることが当たり前になり、市民主体のまちづくりが文化として定着するよう、多くの市民に役割を担ってもらい(＝種を蒔く)ことに主眼を置き策定しました。

#### ●計画策定過程で目指した3つのこと



#### ●策定の趣旨のイメージ図



### 2. 計画の構成

ながくて未来図とは、本市が目指す10年後の姿やそれを実現するための施策を示した「まちづくりの指針」となる大切な計画です。「基本構想」「基本計画」「アクションプラン」の3つの階層で構成され、基本構想、基本計画の計画期間は10年、アクションプランの計画期間は5年となっています。また、市民主体のまちづくりを一層推進するために、市民が、基本構想を実現するために実行する取組を「市民まちづくり計画」としてまとめています。

#### ●ながくて未来図の構成



- 基本構想** 目指すまちの姿を示したもの。まち全体の「将来像」と分科ごとの具体的な目指すまちの姿「基本目標」、基本目標実現のためにすべきこと「政策」からなる。【計画期間】2019～2028年(10年間)
- 基本計画** 基本目標を実現するための「施策」の基本的な方向性を体系的に示したものの。【計画期間】2019～2028年(10年間)
- アクションプラン** 基本計画で示した施策にひも付く「事業」をどのように実施していくかの行進をまとめたもので、毎年度進捗管理を行う。【計画期間】2019～2023年(5年間) ※アクションプランは毎年度進捗を管理し、2023年中間見直しを実施
- 市民まちづくり計画** 基本構想実現のために市民が取り組むもの(＝市民アクション)をまとめたもの。【計画期間】2019～2028年(10年間)

ながくて未来図(第6次長久手市総合計画)概要版より

<https://www.city.nagakute.lg.jp/material/files/group/2/6soukeigaiyouban.pdf>